

無 碍 一 道 論

松 永 大 覺

無碍の一道論を歎異鈔を中心として論及していこうと思う。歎異鈔第七章に

「念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば信心の行者には天神地祇も敬服し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報も感ずること能はず、諸善も及ぶことなき故に、無碍の一道なり、と云々」と、即ち親鸞は「念仏者は無碍の一道なり」と味得されたのである。念仏する人が無碍の道、自由の大道であることを顯示してゐるのである。自由の要求は凡ゆる人間の欲求であり、衷心よりの叫びである。如何なる人間も自由を欲求しないものはないのである。而して自由を得る為に最後の最後まで努力を続けるのである。が然し結局は大部分の人間は自由を欲求しながら自由になることが出来ずにそれと反対に不自由のまま死んでゆくのである。果して然らば眞の自由とは何であるかと云えば客觀の現象が主觀の欲求に適應することであ

る。故に自由を獲得すると云うことは客觀が主觀に適應するようになるか、主觀が客觀に適應するようになるか、の二つでなければならぬ。物質や名譽、地位、學問、金錢さえあれば凡ゆることが自由になると考えて居るのは物質や、名譽や地位、學問や金錢と云う客觀的のものの主觀的に適應せしめ、この力を以て他の客觀的な物質を自由にしようとすることであるが、然し斯くの如きものは決して眞の自由でもなく、又眞の自由になるのではないのである。昔釈尊が出家得道されたのは眞の自由を得たいと云う欲求からであつたのである。その眞の自由を得たいと云う欲求は人間が生老病死の為に束縛されてゐるのである。故にそこからの解放を望まれ、遂に仏陀伽耶の菩提樹下に於て端座思惟して三十五才にして眞の自由を獲得されたのである。其の釈尊の獲得された眞の自由とは物質界に於てではなくて、主觀の上である精神界に於てであつたのである。而してその自由の相はいかやうであるかと云えば、それは歎異鈔第七章に親鸞が味得された大趣旨である。眞の自由とは煩惱の束縛のなきことであり、障碍のないことである。故に自由の大道は無碍の一道である。この無碍の一道こそ我

々が進まなければならぬ真実の大道である。

二

果して然らば無碍の一道とは如何なることであらうか、無碍とは端的に云えば障碍なしと云うことであつて、自由を意味し、平和を意味し、常住不変を意味するのである。無碍は通常仏の徳を讃嘆するのに使用されている文字である。即ち無碍光如来（印度の天親菩薩の著浄土論）とか、無碍人（支那の曇鸞大師の著浄土論註）と云われているのである。即ち仏果をさした言葉である。

親鸞はこれを本典行巻に曇鸞大師の論註の釈を引用して

「菩薩はかくの如く五門を修して、自利々他して、速かに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たまへり、かるが故に仏の得たまふところの法を名けて阿耨多羅三藐三菩提となす、この菩提をえたまふを以ての故に、名けて仏となす。今、速得阿耨多羅三藐三菩提といへるは、これ早く仏になることを得たまへるなり（中略）統ねてこれを訳して、名けて無上正遍道となす、（中略）道は無碍道なり、經（萃嚴經明難品）にはく十方無碍人一道より生死をいでたまへり、一道は一無碍道なり、無碍はいはく、生死すなはちこれ涅槃なりと知るなり、是のごとき等の人の不二の法門に入るは無碍の相なり」と。

無碍の一道はもと華嚴經に顕示された言葉であつてそれを支那の曇鸞大師が論註に引用されたのである。生死即涅槃の絶対知見こそ無碍道と云はれるものであると云うことを知らなければならない。一道とは無

二亦無三であつて唯一の道と云うことである。唯一の道が障りが無いと云うことは、生死即涅槃と云うことであつて、法蔵菩薩の自利々他成就して得たまひし道である。正しく仏の大道であり、絶対他力の大道と云うに等しいのである。故に無碍の一道とは仏道又は如来道である。即ち無碍と云い、一と云い、道と云う皆是れ対する所は如来の徳に外ならないのである。然らば何故如来は無碍であるかと云えば、如何なる障害にも妨げられないからである。如来は何故一であるかと云えば絶対無二であるからである。如来は何故道であるかと云えば如来は一切を我々衆生の爲に提げて自ら道路となられるからである。これ実に他力を顕す言葉である。故に如来を信じ念仏を称える人はそのまま仏道であり、如来であり、自由の大道であり、無碍の一道である。

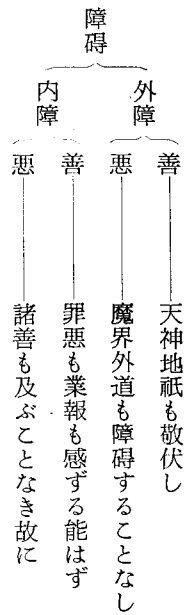
親鸞はこの味はいを弥陀和讃（第八首）に

「信心ヨロコブソノヒトヲ 如来トヒトシトキタマフ

大信心ハ仏性ナリ 仏性スナハチ如来ナリ」と。

無碍の一道はすべて如来の真実功德相である。この如来の真実功德相がそのまま我々人間の生活に顕現し給うのである。故に「念仏者は無碍の一道なり」と感得せられるのである。乃ち念仏者の具有する所の功德を四つの事例を以て顕示しているのが歎異鈔第七章の「そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍する事なし、罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善も及ぶことなきゆえに無碍の一道なりと云々」と。

これを図示すれば次の通りである。



先づ初めに外障の善である第一の天神地祇について考察するに、これは嚴密に云えば天つ神国つ神であるが、而しこは広く普ねく天地自然に満ち満ち給う神々である。これは決して現代人が考えて居るが如き多神教や汎神教ではないのである。論理や理論で創造したものはなく、人間の理智に先だつて法爾自然の靈者であつて、通俗的な民間信仰でもなく、迷信の対象でもないのである。これらの「神々が敬伏し」とある所に何か知らぬが非常に尊い世界があると思ふのである。

敬伏は向うがこちらを敬伏すると云つて僥倖するのではなく、こちらが向うを敬伏するから向うもこちらを敬伏し給うのである。神と人が互に感應道交の故に互に敬伏するのである。神を敬伏する時は仏法は榮え、神を敬伏しない時は仏法は衰える事は当然であると思ふのである。

次に外障の惡である第二の「魔界外道も障碍することなし」とは魔は仏教本来から云えば人間の眼には見えないけれども人間を誘惑し、人間を苦しませるのが魔なのである。それ故に魔界と云うものは我々の眼には見えないのである。外道と云うことは異端者、仏教以外のものであるから、考え方によると仏教以外の宗教は皆外道でなければならぬ。或は思想的に云えば涅槃の道を説かない哲学思想は

皆外道である。これ等の魔界も外道も念仏者を障碍しないのである。それは何故であるかと云へば、念仏者は業の苦の人生に随順することを避けたいからである。常に人間の生活に随順しつつ而かも心に涅槃を念するのである。斯くの如き境地にある限り魔界も外道も障碍することは出来ないであろう。人間である以上我々も愛欲に動かされ、名利に支配されざるを得ないのである。親鸞も「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑す」と仰せられてゐる。然し我々は愛欲の広海に沈没してゐることを知っている。名利の大山に迷惑する自己であると云うことを知っている限り、其の愛欲も我々の障碍にはならず、名利も亦それによつて魔がさすと云うこともないのである。涅槃を目指している所の念仏者に対しては魔界も外道も障碍することは出来ないのである。故に念仏者は無碍の一道である。誠に念仏者の絶対權威を明かにされたことは意義の深いことである。

これを華嚴經に伺うと

「譬へば人ありて師子筋を用ひ琴絃と爲し、音声一たび奏すれば余の諸絃悉く皆断壊するが如く、若人菩提心の中に念仏三昧を行ずれば、一切の煩惱、一切の諸障悉く皆断滅す。」

「亦人ありて牛羊驢馬一切の諸乳を搾り取りて一器の中に置き、其中へ獅子の乳の一滴を投ずれば、直ちに一切の諸乳悉く皆清水と變ずるが如く、若人但能く菩提心の中に念仏三昧を行ずれば、一切の惡魔諸障直ちに過ぎて難無し。」

「譬へば人ありて、翳身藤（身をかくす葉）を持って、処々に遊行すれ共一切の余人是人は見ざるが如く、若し能く菩提心の中に念仏三昧

を行ずれば、一切の悪神、一切の諸障是人を見るも詣る所能く遮ることなく也」と。

又十往生経には

「若し衆生ありて阿弥陀仏を念じて、往生を願ふ者は彼の仏即ち二十五の菩薩を遣して行者を護念し給ふに、若しは行、若しは座、若しは住、若しは夜、若しは昼、一切の時、一切の処に悪鬼悪神をして其便を得せしめ給はず。」と。

又和語灯録には

「弥陀の本願を深く信じて念仏して往生を願ふ人をば、弥陀仏より始め奉つりて十方の諸仏菩薩觀音勢主、無数の菩薩、此人を圍繞して行住座臥、夜昼をも嫌はず、影の如くにそひて、諸の横惱を為す悪鬼悪神の便りを払ひ除き給ひて、此世には横なる煩ひなく、安穩にして命終の時、極樂世界へ迎へ給ふ也。されば念仏を信じて往生を願ふ人は、殊更に悪魔を払はんが為めに、よろづの仏神に祈りをもし、慎をもする事なじかはあるべきぞ。況人や仏に帰し、法に帰する人には一切の神王恒沙の鬼神を眷屬として常に此人を守り給ふと云へり。然らば是の如き諸仏諸神圍繞して守り給はん上は又いづれの仏神かありてなやまし妨ぐる事あらん。又宿業限り有りて受くべからむ病はいかなる諸の仏神に祈るとも其れに依るまじき也。祈りによりて病も止み、命を延びる事あらば誰かは一人として病みぬる人あらんや。」と。

又親鸞は現世利益和讃に（第三首より第十五首）

「一切の功德ニスグレタル 南無阿弥陀仏ヲトナフレバ

三世ノ重障ミナナガラ カナラズ転ジテ輕微ナリ

南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	コノ世ノ利益キハムナシ
流転輪廻ノツミキエテ	定業中天ノゾコリス
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	梵王帝釈婦敬ス
諸天善神コトゴトク	ヨルヒルツネニマヒルナリ
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	四大天王モロトモニ
ヨルヒルツネニマモリツツ	ヨロヅノ悪鬼ヲチカヅケズ
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	堅牢地祇ハ尊敬ス
カゲトカタチトノゴトクニテ	ヨルヒルツネニマモルナリ
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	難陀跋難大竜等
無量ノ竜神尊敬シ	ヨルヒルツネニマモルナリ
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	炎魔法王尊敬ス
五道ノ冥宮ミナトモニ	ヨルヒルツネニマモルナリ
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	他化天ノ大魔王
釈迦無尼仏ノミマヘニテ	マモラントコソチカヒシカ
天神地祇ハコトゴトク	善鬼神トナツケタリ
コレラノ善神ミナトモニ	念仏ノヒトヲマモルナリ
願力不思議ノ信心ハ	大善提心ナリケレバ
天地ニミテル悪鬼神	ミナコトゴトクオソルナリ
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	觀音勢主ハモロトモニ
恒沙塵数ノ菩薩ト	カゲノゴトクニ身ニソヘリ
無碍光仏ノヒカリニハ	無数ノ阿弥陀マシマシテ
化仏オノオノコトゴトク	眞実信心マモルナリ
南無阿弥陀仏ヲトナフレバ	十方無量ノ諸仏ハ

百重千重圍繞シテ

ヨロコビマモリタマフナリ」と。

次に内障の悪の「罪悪も業報を感ずることあたはず」とは罪惡として、業苦は業苦として、それが念仏によって皆熾悔せしめられるのである。而して其の罪惡の感じがやがて人々に対する深き悲しみとなるのである。自己の罪惡を知ることによって、そこに人間の業苦に対する悲しみを持つことになるのである。而して其の悲しみを持つことによって、凡ゆる人に親しみを持つこととなるのである。即ち業苦を縁として我々は慈悲心を感じ、或は懺悔の心にならしめられるのである。ここに於て其の罪惡も業報を感ずることなくて、反つて念仏によって慈悲の心及び懺悔の心が燃やされる所のものとなってゆくのである。それが念仏の徳であつて念仏によつて斯くの如き境地にならしめられるのである。即ち念仏の智慧によつて照されるが故に智慧が主体となつて、客体として照し出されるものは煩惱熾盛罪惡深重である。この自覺の前には如何なる苦惱も障りも、災いも、皆忍受せらるるのである。否むしろこの苦惱あればこそ喜びに転ずるのであり、その苦惱の生甲斐を感ぜしめらるるのである。

その次に内障の善の「諸善も及ぶことなき故に」とは歎異鈔第一章の「しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず念仏にまさるべき善なきゆへに」と。同じことである。如何なる善と雖念仏には及ばないのである。諸善は相対的であつて、必ずそれによつて対治すべきもを持つていたのである。善は人間の理想である。理想である限り、その理想に背く現実と闘はねばならないのである。美は醜と争い、智は愚と争い、眞は偽と争うと云う形で善は惡と必ず対立するものであ

る。人間の世界の諸善は所謂自力作善であつて、自力作善は有為有漏の善である。これを虚仮雜毒と云うのである。

親鸞は本典信巻に

「一切の群生海無始よりこのかた乃至、今日今時に至るまで穢惡汚染にして、清淨の心なく虚仮詭偽にして眞実の心なし」と。

又悲歎述懐和讃（第一、二、三首）：

「淨土眞宗ニ帰スレドモ 眞実ノ心ハアリガタシ

虚仮不実ノワガ身ニテ 清淨ノ心モサラニナシ

外儀ノスガタハヒトゴトニ 賢善精進現ゼシム

貧賔邪偽オホキユヘ 奸詐モモハシ身ニミテリ

悪性サラニヤメガタシ ココロノ蛇蝎ノゴトクナリ

修善モ雜毒ナルユヘニ 虚仮ノ行トゾナツケタル」と。

要するに諸要は凡夫の自力作善有為有漏の善である。我々はそれを修して善果を求めるのである。而るに念仏は如来廻向の善であるから無為無漏の善である。自然法爾であり、本願力廻向の善であるから無漏の善である。又無為無作の善である。法爾自然に本性として善である故にこの善は惡に対する善ではなくて、惡をも撰めとる善である故にこの善は絶対の善である。我々自力の善は惡に対する善であるから、時と場合によつては惡に變ずる時もある。故に親鸞は「定心修し難し息慮凝心の故に散心行じ難し廢惡修善の故に」と。仰せられた如く思うように修することは出来ないのである。故に凡夫自力の善は念仏の善には到底及ぶ所ではないのである。故に「念仏者は無碍の一道なり」と云われるのである。

三

人生は有碍のものであって、諸善はどこまでいっても有碍の道である。故に念仏は絶対の道であると云うことも云われるであろう。

親鸞は本典行巻に（四十七丁左）念仏と諸善と比較対論されているのである。

「即ち念仏は行じやすく、諸善は行じがたい（難易対）。念仏は頓速にさとりを開き、諸善は漸次に進む（頓漸対）。念仏は直ちに迷いを離れ、諸善は次第に迷いを出る（横豎対）。念仏は迷いを飛び超え、諸善は歩いて渉る（超涉対）。念仏は本願に順じ、諸善はこれに逆らう（順逆対）。念仏は大善根であり、諸善は小善根である（大小対）。念仏は多善根であり、諸善は少善根である（多少対）。念仏は勝れた法であり、諸善は劣った法である（勝劣対）。念仏は弥陀に親しく、諸善はこれに疎い（親疎対）。念仏は弥陀に近く、諸善はこれに遠い（近遠対）。念仏は深い法であり、諸善は浅い法である（深浅対）。念仏は強い法であり、諸善は弱い法である（強弱対）。念仏は重い法であり、諸善は軽い法である（重軽対）。念仏は利益するところが広く、諸善は狭い（広狭対）。念仏は専ら極楽往生の行であり、諸善は他に通ずる行である（純雜対）。念仏はさとりを得る近道であり、諸善は廻り道である（徑迂対）。念仏ははやい法であり、諸善はおそい法である（捷遅対）。念仏は特別勝れた法であり、諸善はつねなみの法である（通別対）。念仏は退転しない法であり、諸善は退転する法であ

る（不退退対）。念仏は直ちに往生の行として説かれ、諸善は他のついでに説かれた（直弁因明対）。念仏は名号に即し、諸善は定散の自力の行である（名号定散対）。念仏は道理を尽くし、諸善は道理を尽さぬ（理尽非理尽対）。念仏は諸仏が勧め、諸善は諸仏が勧められぬ（勸無勸対）。念仏には間隙がなく、諸善には間隙がある（無間間対）。念仏は断絶せず、諸善は断絶する（断不断対）。念仏は相続し、諸善は相続しない（相続不続対）。念仏には、上の利益があり、諸善は有上の利益である（無上有上対）。念仏は上々の勝れた法であり、諸善は下々の劣った法である（上々下々対）。念仏ははかりがたい尊い法であり、諸善は思いはかられる法である（思不思議対）。念仏には弥陀の果上の徳がおさまり、諸仏以外の者が積み行である（因行果徳対）。念仏は仏の本意を説かれた法であり、諸善は他の根機に応じて説かれた法である（自説他説対）。念仏は仏から廻向された法であり、諸善は衆生が廻向する法である（廻不廻向対）。念仏は仏に護られ、諸善は護られぬ（護不護対）。念仏は諸仏が証明され、諸善は証明されぬ（証不証対）。念仏は諸仏に讃歎せられ、諸善は讃歎せられぬ（讚不讚対）。念仏は弟子に付嘱せられ、諸善は付嘱せられぬ（付嘱不付嘱対）。念仏は究竟した了義の法であり、諸善は不了義の法である（了不了義対）。念仏はわれわれの根機に適し、諸善はこれに適しない（機堪不堪対）。念仏は弥陀が選び取られた法であり、諸善は選ばれぬ法である（選不選対）。念仏は真実の法であり、諸善は方便の法である（真假対）。念仏は極楽で仏の入滅を見ず、諸善は入滅を見る（仏滅不滅対）。念仏は法の滅する末の世にも利益があり、諸善は利益が

ない（法滅利不利対）。念仏は他力の行であり、諸善は自力の行である（自力他力対）。念仏は本願の行であり、諸善は本願ではない（有願無願対）。念仏は行者が撰取せられ、諸善は撰取せられぬ（撰不撰対）。念仏は正定聚に入り、諸善はこれに入らぬ（入正聚不入対）。念仏は眞実報土に生まれ、諸善は化土とどまる（報化対）。

と。云々念仏を以て絶対不二と仰せられているのである。

又機について親鸞は比較して引き続き対論されている。即ち

「念仏の人は仏智を信じ、諸善の人はこれを疑う（信疑対）。念仏の人は本願を信ずるから善であり、諸善の人はこれを疑うから悪である（善悪対）。念仏の人は正念を得た人であり、諸善の人は邪雜の人である（正邪対）。念仏の人は本願を信ずるから是であり、諸善の人はこれを疑うから非である（是非対）。念仏の人は他力の眞実を得、諸善の人は自力の虚仮である（実虚対）。念仏の人は他力の眞実を得、諸善の人は自力の邪義である（眞偽対）。念仏の人は他力清淨の法を得、諸善の人は自力雜穢である（淨穢対）。念仏の人は仏智を信ずるから智慧すぐれ、諸善の人はこれを疑うから智慧おとる（利鈍対）。念仏の人は速やかにさとりに至るからはやい人であり、諸善の人はおそい人である（奢促対）。念仏の人は名号の徳を得るから尊い人であり、諸善の人はいやしい人である（蒙踐対）。念仏の人は仏智を明らかに信ずる人であり、諸善の人は本願い暗い人である（明闇対）。」と即ち念仏は諸善も及ばないと云うことに於て絶対不二であると云われるであろう。絶対は対を絶すると云うことであつて、対を絶すると云うことは対が無いと云うことである。即ち善と悪との対立を絶して

無碍 一道論

ゆく所に念仏の大道があるのである。善と悪との対を絶せしめる故に善も誇りを捨て、悪もひがみを捨てると云う道が現われてくるのである。而して悪をして懺悔せしめ、善をして誇りを捨てしめると云うはたつきは念仏以外にはないのである。斯くして信心の行者をば凡ゆる神々が守護し給うのは人が尊いのではなく、法が尊いのである。法が尊きが故に人も亦尊いのである。人尊きは法尊きによるのである。信心の行者を守護し給うのは、行者が尊いのではなく、行者に行ずる所行の法が尊いことを顯わす為に能行の人を通して所行の法の尊いことを明らかにされたものである。人は法を所有しないが、法は人を所有する故は、人が法を私有しなければ法はその人となるのである。されば人は本願の名号を執することがなければ本願の名号はその人を撰取し捨て給はぬであろう。此ここに於て宗教的な人があるのである。これを最もよく顯示しているのが「念仏者は無碍の一道なり」である。もし人と法を分別する立場から云えば、念仏そのものが無碍の一道であつても念仏者を無碍の一道と云うことは云えないであろう。然し念仏と念仏者とを別けると云うことは畢竟抽象的な思想にすぎないのである。何故ならば「念仏もうさんと思いたつ心」が眞実の念仏ならば、その念仏の外に念仏者はないのである。即ち念仏者の外に念仏はないのである。乃ち念仏は無碍の一道であると云うよりは、念仏者は無碍の一道であると云う表現は一層直接的な表現でなければならぬ。故に淨土眞宗の教法は人法融一の通となるのである。

要するに無碍の一道はもと華嚴經明難品に現われた言句であつてそれを曇鸞大師は論註に引用されたものである。即ち生死即涅槃という

無碍 一道論

不二の法門を指したものである。法蔵菩薩の自利々他成就して得た正しい道であって、南無阿弥陀仏の一道に具体化されるのであって、如何なる罪惡にも、いかなるものにも障害をうけない往生極樂の道である。何ものにも障えられない所の涅槃の道である。これが無碍の一道である故に念仏者は常に無碍の一道を歩むのである。まことに「念仏者は無碍の一道なり」と云う語こそ人間中心の要求に應ずるものであり、仏教の真髓を最も明白に記された尊き慈悲の声である。

(本学教授―宗教学)